

『南アフリカ の歴史』

「創土社」

「創土社ケンブリッジ版世界各国氏」

「ロバート・ロス著、268頁」

20078114 山田拓斗

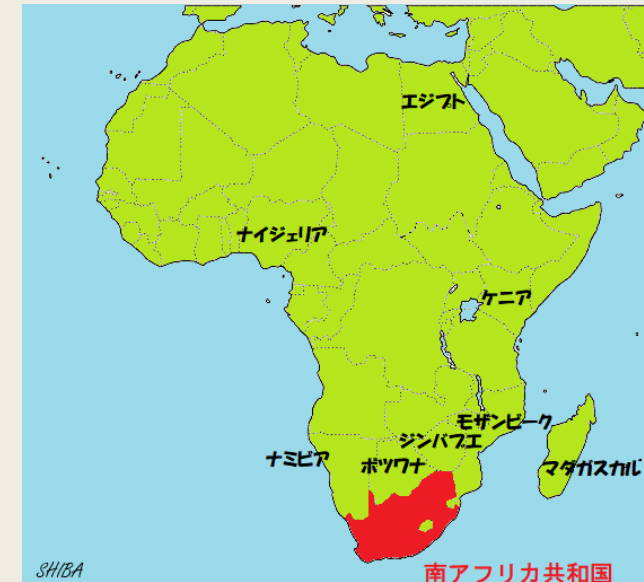
目的

- 南アフリカがどのように世界史に組み込まれるようになったか
- 南アフリカはどのように展開され、現代のようになっていったのか
- 現代の南アフリカの課題はなにか

1 章

南アフリカはアフリカ大陸の南部に位置しており、海拔 1 5 0 0 m ~ 2 0 0 0 m の台地であり、この台地は断崖層に囲まれている。

南部アフリカからは、初期人類の遺骨やヒト化動物の化石も多く発見されており、非常に古い歴史を持つ。



2 章

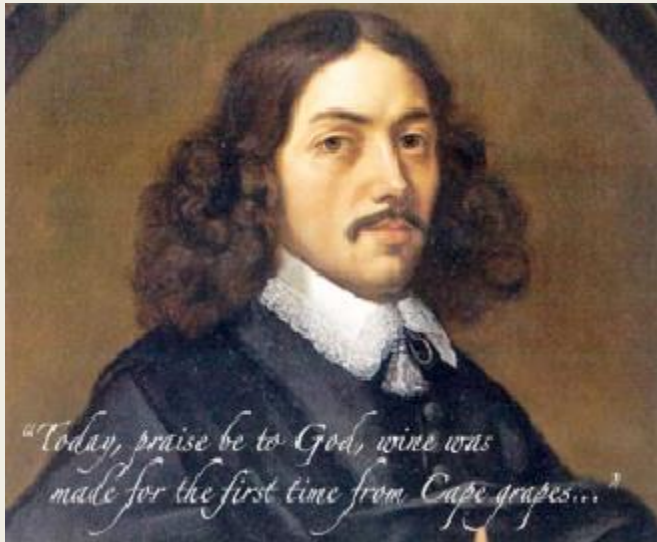
南アフリカは16世紀以降、ヨーロッパの商船が東南アジアの沿岸を往来するようになるころ、世界史に組み込まれるようになった。

それ以降、無関係であった西欧列強の野心の対象となり、植民地化されていくのであった。

特に南アフリカは、ヨーロッパから東インド会社を往復する際、季節風を利用するのに最適な場所に位置していた。

そのため、中継地を設けるため
ヤン・ファン・リーベック率いる少人数のオ
ランダ人が1652年上陸した。

この時点から南アフリカは現在の共和国への
歴史を歩み始めることとなる。



ヤン・ファン・リーベック
(1619年~1677年)

3章

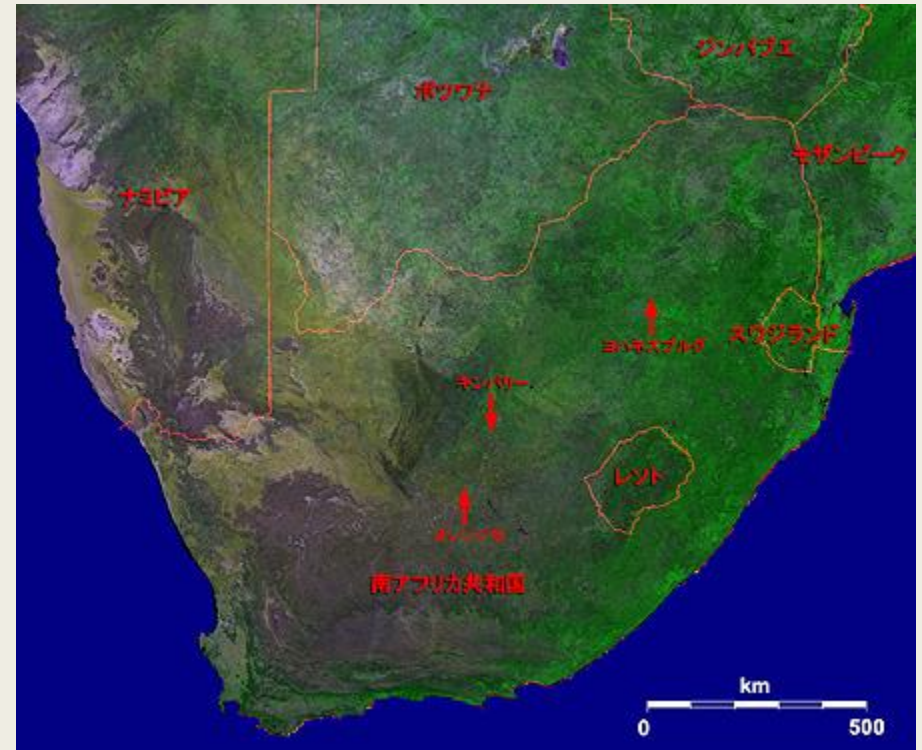
長らくオランダに支配されていた南アフリカ（ケープ植民地）は、フランスの手に渡ることを恐れたイギリスに1795年に占領されることになる。

イギリスに支配されたことで、経済、社会、政治が大きく変化する転機となり、特に経済はワイン生産や、羊毛（メリノ羊）飼育により急激に成長した。



4 章

1867年、オレンジ川、フォール川の合流地点付近（キンバリー内）の堤防でダイヤモンドを発見した。しかも、1つだけでなく、4つの鉱床が発見され、キンバリーは瞬く間に鉱業都市となった。



鉋床発見により、労働者が不足するようになり、これまでは数百キロしか敷かれていなかった鉄道網が大幅に拡大された。

ここで初めて南アフリカ全体が単一の経済圏として統合され始めた。

これをきっかけに、南アフリカを統合しようとする試みがいくつもみられるようになる。

5 章

南アフリカ内のオランダ領（トランスバール）で無尽蔵の金鉱が発見された。

これを狙うイギリスと戦争になり、これを一時アフリカーナは勝利を収める。

（第一次ボーア戦争1880年～1881年）

再び戦争になった第二次ボーア戦争（1899年～1902年）では、イギリスが勝利を収めた。

その結果、1910年にはケープ州・ナタール州・トランスバール州・オレンジ州の4州からなる南アフリカ連邦が成立した。

6 章

アパルトヘイトという言葉は単に「分離」を意味しているが、国民党（マラン率いる）がスローガンに掲げ、1948年に選挙に勝利したことで、政府の方針を示す合言葉となった。

全国民を「人種」に分類し、人口登録法や人種間通婚禁止法などが制定され、人種別に居住地を制定するなどの政策を行った。
また、強制移住や低賃金労働など様々な問題があり、アフリカ人は苦悩の日々を送った。

そんな中、アフリカ人は1940年に「青年同盟」を結成により、アフリカ民族会議（ANC）が抵抗運動を始める。

1967年にはソウエトの黒人学生がデモ活動開始をきっかけに警察と衝突し、多くの黒人が殺害された（ソウエト蜂起）。

その後も抵抗運動はあったが、ソウエト蜂起から数年の内に、抵抗運動に対する弾圧を軟化させており、ソウエト蜂起はアパルトヘイトの終わりの始まりを告げていた。



6 章

1990年 2 月になると、アパルトヘイトを正当化してきた法律が次々に廃止されていった。

ネルソン・マンデラが1994年に大統領に就任すると、「自由の国」を目指し、政策を押し進めていった。



ネルソン・マンデラ
(1918年~2013年)

結論

- 南アフリカはいまだに過去の清算をしきれておらず、とくにアパルトヘイトの名残は明らかに存続している。

目標にしてきた「自由の国」とは程遠くはあるが、正常な国になり始めており、経済成長率も人口増加率を上回る記録を達成し続けている。

貧富の差解消には長い年月がかかるかもしれないが、貧しい人々も徐々に経済発展の恩恵を受けており、今後の動向に注目が集まる。